

# 水辺の風景・その潤いと生活

## 向井潤吉の川と海の民家



《渡月橋畔にて》1957年

1994年5月21日[土]—8月28日[日]

開館時間—午前10時—午後6時(入館は5時30分まで)

休館日—毎週月曜日(休日にあたる場合は翌日)

観覧料—一般200円(160円) 大高生150円(120円) 中小生100円(80円)

( )内は20名以上の団体料金

世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581



《一隅の風景(茨城県東茨城郡大洗町)》1975年



《層雲(青森県北津軽郡市浦村協元)》1964年

向井潤吉氏の戦後の画業を顧みれば、すでに皆様をご承知のとおり、それらの多くは日本各地の民家をモチーフとした作品によっています。かつては日本のどこの農村地帯でも、またふと通りすがった山あいの集落などに見ることのできた茅や藁でふかされた民家は、昨今に及んではほとんど目にすることができなくなりました。時代の流れの中で、産業形態と生活様式の変遷が津々浦々へと波及していくと呼応して、古い形態の民家は消えていったのです。氏の作品に描かれた民家の多くも、おそらくはすでに住み手を失ったり、その姿をまったく変えているものが多いことでしょう。

向井氏の民家作品でよく知られているものは、山間の集落や、農村地帯の民家をモチーフとしたものですが、氏の画家としての視線は、海辺の民家、あるいは川に寄り添う民家、そしてそこに生活する人々の日常にも向けられています。人間が生きていくために必要不可欠な“水”は、生きとし生けるものにとって嬉しい天の恵みですが、川や海に生きる人々にとってはより生活に密着した大切な存在です。時に水は天災となって生命をおびやかすほどの恐ろしさもありますが、水からは生命が生まれ育まれる豊かさがあり、そして水辺に生きる人々の日常の糧となる収穫もたらされるのです。

本展では向井潤吉氏の油彩による水辺にある民家作品およそ20点と、水辺に生きる人々の日常を描いたスケッチなど20数点を展示し、画家が見た“水”と“民家”と“生活”のある風景をご紹介します。

またあわせて、昭和初期に制作し、向井潤吉氏がこれまで大切に所蔵してきた、ローマやスペインの街角風景を描いた“豆絵”も数点展示いたします。



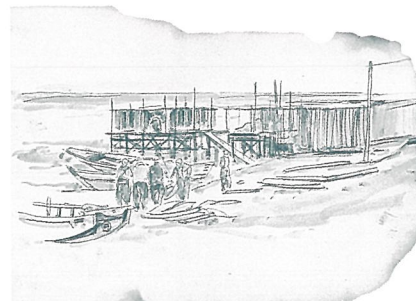
《春塘(埼玉県川越市郊外)》1984年



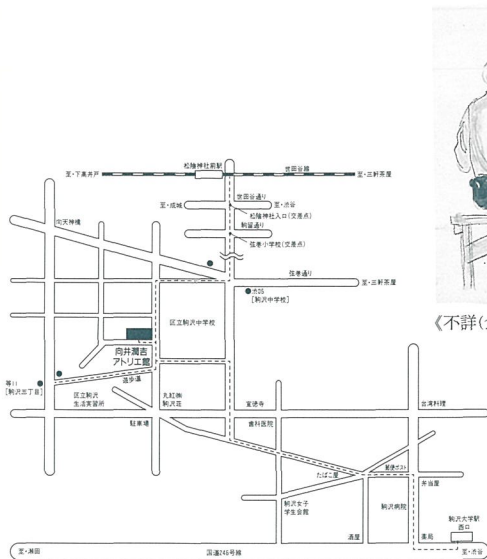
《伊豆大島元村(東京都大島支庁大島町元町)》制作年代不詳



《不詳(食事風景)》制作年代不詳



《不詳(漁村風景)》1954年頃



●最寄り交通機関のご案内

東急新玉川線【駒沢大学】 駅西口 下車/徒歩10分

東急世田谷線【松陰神社前】 駅 下車/徒歩17分

東急バス (渋05) 渋谷～弦巻営業所 【駒沢中学校】 停留所下車/徒歩3分

東急バス (等11) 祖師谷折返所～等々力 【駒沢三丁目】 停留所下車/徒歩6分

東急バス (渋11) 渋谷～田園調布 【駒沢大学駅前】 停留所下車/徒歩10分

東急バス (渋13) 渋谷～陸本村 【駒沢大学駅前】 停留所下車/徒歩10分

世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154 東京都世田谷区弦巻2-5-1

TEL 03-5450-9581